

英語を学ぶ —— 子どもから大人まで ——

了徳寺大学教養教育センター 山内久明

YAMANOUCHI, Hisaaki: Professor, Centre for Liberal Arts Education

Ways of Learning English: From Children to Grown-ups

【要旨】英語教育をめぐる論議は、教育行政担当者、教育機関、教育研究者だけでなく、社会一般を巻き込んで絶え間なく続いている。英語教育は現状のままでよいのか、伝統的教育法に欠陥はないか、文法・読解でなくコミュニケーション中心の英語教育への転換が正しいかどうか。そして賛否両論ある議論を経て、小学校における早期英語教育が実現した。本稿は政策の処方ではなく、問題点を分析し、記述することを目的とする。早期英語教育問題に対する示唆を得るために、日本人の子どもが英語文化圏で育つ体験について分析的に記述する。それに関連して、イギリス文化の真髄ともいえるべき「わらべ歌」について考察する。これらの考察を経て、早期英語教育が問題解決の終点ではなく、むしろ入り口に過ぎず、真の問題はその先にあることを主張し、学術、企業、国際政治などの場で必要とされる、高いレベルでの真の自己表現のための英語とはどのようなものであるか、試論的に記述・提言する。

キーワード：文法対コミュニケーション、小学校の英語、英語文化圏で育つ子ども、わらべ歌、
真の自己表現

【Abstract】 The problem of teaching and learning English has been continuously and widely discussed not only by the Ministry of Education and Science, schools and universities, academic specialists but also by Japanese society at large. The questions involved are indeed varied. Is the present state of English teaching to be approved? Are there not defects or shortcomings in it? Should it not be geared to 'communicative English' rather than to the grammar-orientated teaching of written English? After the heated discussions both for and against it the policy of teaching English at primary school has come into effect and has already been put into practice. The present paper does not propose to 'prescribe' any particular therapy or treatment but only aims to analyse or 'describe' the problems involved in the teaching and learning of English. In order to gain insight into and obtain hints about the problem of teaching English at primary school the paper will discuss what would happen to Japanese children when they are brought up in an English-speaking country. In this connexion the paper will analyse "Ring-a-ring o' roses", one of the most famous Mother Goose nursery rhymes, and, for the sake of comparison, two songs, French and Japanese respectively, which can link up with it through the key image of dancing in a ring. On the basis of these analytical observations the paper will attempt to conclude that the teaching of English at primary school cannot be the goal of but merely a prologue to English learning; and that the real question, which is far more overwhelmingly

demanding, is how academics, business people, diplomats, etc. could acquire the command of English at a higher level by means of which they could each communicate on the equal footing with their respective counterpart in the international arena of this globalised world.

Keywords : Grammar v. communication; English teaching at primary school; Japanese children reared in an English-speaking country; Mother Goose nursery rhymes; How to express oneself in English

1. はじめに

学校あるいは大学における英語教育をめぐる議論は、教育行政担当者、教育研究者のみならず、ひろく社会を巻き込む形で絶え間なく行われてきた。それは何を意味するか。英語教育の現状がこれでよいのかどうか、よくないとすれば改善のために何が必要か、これらの問題に対する関心が高いことを意味する。そして、学校や大学における学習者のみならず、広く英語を必要とする社会人にも、英語を読み、書き、聞き、話すことにもっと熟達したいという願望が強いことをも意味する。

教養教育の一環として英語教育をカリキュラムの一部に含む本学としても、社会における英語教育をめぐる議論を他人事として見過ごすことは許されない。その観点から、2009年度学園祭に合わせて地域連携の一環として行われる第3回公開講座で標記のテーマを取り上げることが教養教育センターが提案し、センター長の成田篤彦教授と山内久明がそれぞれ1時間ずつ講義した。本稿は山内が担当した講義を、2009年度研究紀要のために改訂して寄稿したものである。成田教授による緻密な査読と貴重な助言に感謝する。

現状を分析・認識し記述すること (description) がいわば診断 (diagnosis) に譬えられるとしたら、現状に対処することは、処方 (prescription) あるいはさらに治療 (therapy; treatment) に譬えられるであろう。論文の後半において、「処方」と「治療」に対する多少の言及も含むが、本稿は基本的には「記述」と「診断」を主に議論を展開することをはじめに断りたい。問題は多岐にわたって錯綜し、複雑である。問題によっては異なり対立する立場が存在する。一方から見ると、他方から見るとでは見解が正反対のこともあり得る。しかしながら多くの場合、物事は両面を有し、相反する立場と見解にはそれぞれ一理あり、真理は両者の中間にあることが多い。異なる立場と見解に目配りしながら、問題の整理を試みるのが本稿の目的である。

2. 世間で話題にされること

(1) 英語教育の期間に比して英語がうまくならないのはなぜか

中学入学から大学卒業まで10年間かけて学ぶのに英語が使えるようにならないのはなぜか。この問いははたして正しいかどうか。まず期間に関して、10年という表現が正しいかどうか。大学4年間にわたって、英語を専門に学ぶ者の場合にはたしかに10年と言える。しかしながら、大学4年間にわたって英語自体を専攻するか、あるいはそれ以外の分野を専攻する場合でも、文献を読んだり、国際

学会で発表したり、国際的な学会誌に投稿をしたり、英語を使うことが不可欠な場合を除き、大部分の学生にとって、英語が学ばれるのは、週2回2年間、週2回1年間、週1回1年間（本学の場合）、に留まるのが現実であろう。これでもって、中学から大学まで10年間にわたって英語を学んだということとはできない。

高校、中学における週当たりの時間数も決して十分とは言えないが、現状の範囲内において、十分な達成がなされている場合と、なされていない場合と、格差があるのが現実であろう。尺度となるべきは、中学から大学まで何年間学んだかということではなく、英語学習に費やす総時間数、集中度、内容の密度である。

(2)英語教育に欠陥があるのではないか

文法・読解中心の英語教育がわるい、だからうまくならない、ビジネスや国際会議の場で相互理解と自己表現ができない、このような状況を改善するために、文法・読解中心ではなく、コミュニケーションのための英語教育に切り替えるべきだ、としばしば言われる。果たしてそうであろうか。問題を分けけて、精査することが必要である。

コミュニケーションのための英語教育と言う場合に、コミュニケーションとはいったい何が考えられているのであろうか。それが、ビジネスや国際会議の場での相互理解や自己表現であるとしたら、内容的に専門的であると同時に、英語としても高度のものである。中学、高校はもちろん、大学においてさえも、英語教育の場で即効性を持つように教えることが可能かどうか、おそらく答えは否定的である。一般的に、コミュニケーションのための英語という場合、日常生活の場における日常会話が考えられていることが多い。それはそれで意味のないことではないが、いわゆるコミュニケーションのための英語が、文法・読解と二項対立・二律背反的に考えられ、文法・読解が排除されることがあるならば、それは正しくない。

国語教育、すなわち日本人のための日本語教育においても文法が教えられるが、日本人にとっての母語である日本語の場合、文法が教えられる以前に、生活経験や読書習慣を通じて習得されている。日本人に日本語の文法が教えられる効果は、すでに習得され身についた母語としての日本語を、意識的に体系化して認識することにある。蓄積された経験と習慣の裏づけにより、日本人は必ずしも日本語の文法を知らなくとも日本語を正しく使うことが可能である。しかし、日本人にとって外国語である英語の場合はどうであろうか。蓄積された経験と習慣の裏づけのない外国語としての英語の場合、英語を読み、書き、聞き、話す行為は、母語としての日本語とは異なる英語の構造について文法的に理解しなければ成り立たない。日常生活の場においてであれ、ビジネスや国際会議の場であれ、コミュニケーションのために、文法の知識そのものがコミュニケーションを助長することはないとしても、文法の知識が邪魔になることはないという意味においても、コミュニケーションと文法とは二項対立・二律背反的ではない。

現に、一定以上の年齢層でビジネスや国際会議の場でコミュニケーション能力を発揮している人びとは、文法・読解中心の英語教育を受け、その結果、それぞれの専門分野における文献を不自由なく読むことができ、それに連動してコミュニケーションも成り立っていることに、みずから気付いているはずである。日常生活の場における日常語によるコミュニケーションは、生活の場が与えられ、環境によって強いられば、否応なしに成立する。しかしながら、専門分野でのコミュニケーションは、

文法・読解を基盤とした英語力なしには不可能である。円滑なコミュニケーションを心がけることはよいことであるが、そのために文法・読解の英語教育が排除されるとしたら、それは本末顛倒と言わなければならない。

(3)日本人は英語下手なのか

従来長らく「日本人は英語下手」という風評が流通してきた。これは外からの批判、自己批判、思い込み、自虐的劣等感など、さまざまな可能性を秘めている。この風評は同時に、英語教育政策、教育現場、英語産業などに影響を及ぼしてきた。実態はどのようなのであろうか。

小学校から大学までの段階で、個別教育機関における達成度の査定・評価は機関内で行なわれ、客観的基準に換算されることはむしろ稀である。機関外で査定・評価を行い、客観的基準を示す試験として、従来から、「英語検定試験」（いわゆる「英検」、日本英語検定協会主宰）、TOEFL（=Test of English as a Foreign Language「外国語としての英語テスト」、アメリカのNPOであるETS [Educational Testing Service] 主宰）、TOEIC（=Test of English for International Communication「国際コミュニケーション英語能力テスト」、ETS主宰）が存在してきた。TOEFLはアメリカ留学のための英語検定、それに加えてTOEICは企業人のための英語検定という性格を帯びている。英検はあとの二つに押されて、受験者数に下降傾向が見られる。TOEFLならびにTOEICはいずれもアメリカのNPO主宰の試験である。両者に比べて知名度は低いが、主としてイギリスならびに英連邦諸国の大学に留学するためのIELTS（=International English Language Testing System「国際英語検定」従来The British Council主宰、現在は日本英語検定協会と協同主宰）は、独自の発想に基づく国際検定試験である。

TOEFLならびにTOEICの日本人受験者の試験結果は、文法問題の得点が高く、話す表現力が低い傾向にあった。このような傾向に対する認識が、日本の英語教育政策において、20年来「コミュニケーションのための英語」が指導要領で強調されてきた背景の要因の一つとして考えることができる。近年TOEFLにおいては、文法問題が廃止され、話す表現力に比重が移されたことは、文法上位、話す表現力下位という傾向の見られた日本人受験者にとっては、不利と言える。ちなみにETS2008年度の統計によると、日本人の平均スコアは66点で161カ国中138位、そのうち話す表現力の平均スコアは16点で最下位、1位はデンマークとオランダで102点、韓国は78点、中国は76点となっている。

この統計でデンマークとオランダの得点が高いのは、両国の言語が英語とともにインド・ヨーロッパ語族の中で同じゲルマン系に属し、デーン人支配時代もあったイギリスの歴史的背景も考えれば、容易に理解できる。この統計を見るに当たっては、数字の単純比較だけでは済まされない。各国における受験者総数、総数の中での受験者層の多様性、異なる受験者層の英語の必要性和動機付けなどを比較検討することが必要であると考えられる。平均値とともに、必要性和動機付けの高い受験者層の国際比較（その資料は欠落）をしてみても、その層における日本の数値が低い場合には、深刻な問題として考える必要がある。「コミュニケーションのための英語」が強調され長年にわたり実践されているにもかかわらず、それが効果として表れていないとしたら、文法・読解とコミュニケーションを二項対立・二律背反的に考えて、コミュニケーションを単に「話す技能」として表層で捉える発想に根本的な問題があるのではないか。コミュニケーションという視点を含め、言語表現の問題を包括的・総合的に考えることが求められている。いまここでは、これ以上踏み込んで考える余地はなく、問題提起に留めたい。

(4)英語教育を中学で始めるのでは遅く、小学校に前倒しすべきである

賛否両論ある議論を経て、小学校での英語教育の前倒しがすでに実現した。いかに行われるべきであるかという課題があると同時に、成果の見極めは将来の問題として残される。処方 (prescription) ではなく、記述 (description) を旨とする本稿においては、賛否両論ある問題に黑白をつけることは意図せず、何が問題となってきたか、整理するに留める。

英語教育の早期前倒しの結果、英語の教育期間が延長されるが、議論の過程で、期間延長自体が目的として主張されたことはないと理解する。また、小学校への前倒しによって、中学から大学に到る期間の英語教育の内容がどう変わり、どう影響されるかということが論じられた形跡もない。前倒しによる小学校での英語教育の早期化が、日本人の英語能力を質的に変えることに対する無条件の期待が出発点としてあると受けとめることができる。

さらにこれには、次のような暗黙の前提があると推測される。すなわち、中学生よりも小学生の方が、英語に対して柔軟な潜在的受容力を備えていて、中学生になると教えることが小学生には教えられない。中学で英語が教えられる場合を考えると、学習の程度が高まるにつれて、日本語への置き換えによる類推や比較を伴いながら、英語という言葉に関する知識の体系化が行われる。それに対して、小学校で英語が教えられる場合には、日本語への置き換えや知識の体系化は行われず、日常生活に密着した平易な英語が、いわば遊び感覚で (現に遊びや歌を通して教えられる例があるように)、そのまま直接的に習得される。ここでは、日本の幼児が母語としての日本語を自然に習得するように、また英語を母語とする国の幼児が英語を自然に習得する過程に擬して、日本の小学生が英語を習得することが期待されている。換言すると、日本の小学生のために、英語文化圏において幼児が英語を自然に習得する環境に似た、擬似英語環境を人為的に提供することを意味する。その場合、擬似環境の中で実際に小学生に英語を教える、擬似英語母語者の役割を果たす教員の大量確保が必要とされるが、それに対する対応は十分と言えるかどうか。

小学校英語に対する反対論あるいは慎重論の一つは、小学校高学年において英語よりも必要なのは、日本語学習と日本語による思考力の養成であり、その時期に英語を学ぶことはその妨げとなるという議論である。それに対して、一方で日本語を学習し日本語による思考力を養成することと、他方で英語を学習することが同時に両立する、という議論もあり得るだろう。英語学習が日本語学習と日本語による思考力の養成の妨げとなることは、言語学的・発達心理学的に綿密に証明されているわけではない。逆に、両者が両立することも証明されているわけではない。以下のような場合が想定される。

- ① 日本語学習と日本語による思考力の養成が英語学習によって妨げられ、日本語も英語も身につかない場合。
- ② 日本語学習と日本語による思考力の養成は問題なく達成されたが、英語は身につかない場合。
- ③ 英語は身についたが、日本語学習と日本語による思考力の養成は阻害された。
- ④ 日本語学習ならびに日本語による思考力の養成が達成されると同時に、英語も身についた。

最後の場合が望ましいことは言うまでもなく、それが十分に可能であるとするならば、小学校における早期英語教育には何の問題もない。だが現実問題として、その可能性がすべての小学生に当てはまるとは考えにくい。そこで、果たして小学生全員に英語を教えなければいけないかどうか、という議論が存在する。しかしながら、小学校における早期英語教育はすでにはじまった。もはや後には退けない。おそらく、想定される上記の四つの可能性の相対比率は現段階では予測できず、追跡調査を

待たなければならない。大きい混乱が生ずれば問題であるが、そうでなければ、小学校における早期英語学習は、たとえマイナスがある場合でも、プラスの面が大きいと信じて、この政策が日本人の幅広い層の英語能力の向上にどれだけ貢献したことになるか、5年後、10年後に検証することが求められるであろう。

3. 母語と外国語、習得と学習

前段では世間に流布した英語学習をめぐる話題を整理したが、その前提となる諸概念について考えてみたい。ひとくちに英語といっても、母語である場合、公用語としての第二言語である場合、外国語である場合など、定義を区別して考えることが必要である。

(1)母語、第二言語、外国語としての英語

- ① 母語とは生得の言語、それを用いて育ち、それとともに成長する言語のことである。英語を母語とする国々として、次のものがある。英語の発祥地であるイギリス。かつてイギリスを宗主国とし、今ではイギリス連邦諸国であるカナダ、オーストラリア、ニュージーランド。19世紀から20世紀前半を通じて植民地支配によって世界に英語を流布させたイギリスに代わり、18世紀後半に独立戦争を経てイギリスから独立し、今日グローバル化した世界の超大国として英語を共通語 (lingua franca) の地位に押し上げたアメリカ。世界で英語を母語とする人口は、約400,000,000人である。
- ② かつて宗主国イギリスの植民地で第2次世界大戦後に独立したインドを例にとると、母語はヒンディー語でありながら、分化した方言では相互伝達がむづかしく、英語が母語に近いが、厳密に言えば公用語としての第二言語である。多くのアフリカ諸国においても、母語はスワヒリ語、英語は公用語としての第二言語である。ヨーロッパ連合の場合、加盟各国の母語が連合内で公用語として認定され、ヨーロッパ議会では、それらが英語、フランス語、ドイツ語に翻訳される。発祥地イギリスの歴史の中で、英語はアングロ・サクソン語というゲルマン系の言語と、1066年のノルマン征服の結果、フランス系ノルマン語との混成語となるが、英語の使用能力に関して、ドイツ、オランダ、北欧諸国の人びとが、ラテン系のイタリア、フランス、スペイン、ポルトガルの人びとに優る。かつてフランスは、英語に対して拒否反応を示すことが多かったが、ヨーロッパ連合の現実を前にして、もはや英語の普及を否定することはできない。世界で英語を第二言語として使う人口は、約350,000,000人である。
- ③ 英語が母語でも公用語としての第二言語でもない場合、それが外国語としての英語で、日本、韓国、中国などにおける英語はこの範疇に入る。

自明のことながら、以上の三つの区分に従って、英語に対する露出度が異なることが認識される必要がある。

(2)言語習得と言語学習

「言語習得」(language acquisition)ということばは、母語、第二言語、外国語に関して、区別なく用いられる傾向があるが、厳密に考えると違いがあるはずである。母語の場合、子どもから大人にい

たるまで、経験と習慣を通して自然に「習得」(acquire)される。子どもが習得する母語は生活に密着し、生活の中で経験する「物」に対応し、意識や行為を表わし、コミュニケーションの手段となる。子どもにとっても、大人にとっても、母語は、それなしには生きていくことのできない、生き残りのための言語である。こうして母語は、生活の中での繰り返しを通して習得される。これは、日本人にとっての日本語、英語を母語とする人びとにとっての英語、それぞれに関して言えることである。

「習得」は「自然に身につく」度合いが高いことを暗示するのに対して、「学習」(learn)は意識的・人為的に学ぶことを暗示する。しかし「習得」は「学習」を妨げないだけでなく、実際には、「学習」が「習得」を助け、「学習」なしには「習得」がなく、「学習」の結果が「習得」となる。しかし、ここでは便宜上、「習得」と「学習」を区別するために、「学習」の意識性・人為性を強調しよう。外国語は不可避免的に学習するものであり、一般的に、学習なしに習得はあり得ない。

反面、母語に関しても学習がないわけではない。外国語はもちろん、母語も意識的・人為的・体系的に学ばれ学習される。ただ、学習の形態が、母語と外国語とでは異なっている。母語の場合には、すでに経験、習慣、繰り返しを通して習得された言語が、学習によって矯正され、補強され、母語使用者の意識の中で体系化される。外国語の場合には、ことばに対応して繰り返される経験と習慣のないところで、意識的・人為的・体系的に学習される。その場合に、経験と習慣の擬似体験はあり得る。すなわち、テレビ・ラジオ、視聴覚教材、外国人教師、旅行、短期留学、長期留学などを通じて、擬似体験は体験へと進化する。そして、小学校における英語教育の早期化は、ほんらい外国語である英語の学習を、その最初期段階において、母語としての英語習得のための擬似環境を提供し、擬似体験を通じて行おうとしているものであるとすることができる。

4. 日本人の子どもが英語を母語とする国（英語文化圏）で育つとどうなるか

(1)外国の子どもに近い体験

小学校での英語学習の早期化は、英語が母語として習得される場合の擬似環境と擬似体験を人為的に作り出すという発想が前提としてあると上に述べた。人為的でなく必然的にそのような環境と体験が提供されるのが、幼少期における長期海外生活である。2歳から9歳半までイギリスで育った少年の個人的体験についての観察をもとに、一般論に普遍化して考察を試みる。それでは、海外で育つ日本人の子どもの体験は、英語を母語とする子どもの体験と同一であると言えるであろうか。そうは言えない。違いの一つは、一般的に家庭における両親のことばが日本語であることである。英語に関して、英語母語者の家庭では両親の影響が大きい、英語が母語でない日本人家庭の場合、両親が英語母語者に準ずる場合を別として、両親以上に同年齢の子どもと学校の影響の方が大きい。

(2)二重言語環境・二重言語現象と思考回路

両親が日本人であれば、一般に家庭内の会話においては日本語が使われることが多い。こうして日本語がゼロになることはないが、(1)で述べた理由により、次第に子どもにとっては日本語よりも英語が容易になる。親が子どもに日本語で訊ねると、日本語で内容を理解し、日本語で答えるのがふつうであるが、滞在が長期化するにつれて答えが英語で返ってくる度合いが増す。

(3)日本語と英語の相互干渉

日本で英語を学ぶ場合に、英語表現が日本語の影響を蒙ることは「母語干渉」と呼ばれるが、英語圏で英語中心の生活を営む子どもの日本語が、英語によって影響を蒙る「外国語干渉」現象もあり得る。一例として人称表現が挙げられる。英語では自他の関係が第一人称と第二人称によって明示されるのに対して、日本語では自他の関係において、特に第二人称が表示されない場合が多い。しかし英語で育つ日本人の子どもにとっては、相手を第二人称で示すことが日常化する。その結果、他者である日本人の大人（日本からの来訪者）に向かって、幼児が「あなたは」と連発して、思わず周囲の笑いを誘うことがある。

この問題をさらに広げて考えると、思考回路が次第に日本語から英語へと切り替わっていくことが予測される。それは、具体的日常表現と抽象表現の比率の違いとなって表れる。日本国内において英語を学習する場合、初級英語の段階では、例外もあるが、学習者はふつう英語で日常表現ができるようになるが、抽象的議論は日本語で行う。逆に英語圏で日本の子どもが育つ場合には、日本語の日常表現はできるが、抽象表現は英語による方が容易となる。

論理的思考回路の形成期は何歳くらいか、それは日本語によるべきか、仮に英語で行われた場合に日本語はどうなるか、両言語で行われることは可能か、すなわち真の二重言語主義 (bi-lingualism) は可能か、などの問題が残されている。そのためには、機会を改めて論ずることが必要となる。

(4)英語母語者と日本語母語者

すでに(1)で述べたように、一般に親と子どもの関係は母語で結ばれている。当然ながら、①英語を母語とする国（英語文化圏）の子どもと親との関係は母語（＝英語）で結ばれているように、②英語文化圏にいても日本人の子どもと日本人の親との関係も通常は母語（＝日本語）で結ばれている。英語文化圏で育つ日本人の子どもの英語は、限りなく英語を母語とする英語文化圏の子どもの英語に近づくが、①と②の差異により、英語文化圏の子どもの英語の発達と、英語文化圏で育つ日本人の子どもの英語の発達との間には必然的に違いがあるはずである。この違いを取り払うのは、繰り返しになるが、現地の子どもとの関係、学校との関係である。イギリスには寄宿学校が発達している。イギリスの子どもでも、この制度により、親から引き離され、育った家庭、所属する地域・階級から切り離されて教育が行なわれる場合がある。同じように、日本人の子ともが、親から引き離されて、英語文化圏の寄宿学校に入れられて育つ場合には、英語を母語とする子どもと日本人の子どもの言語的差異は、事実上、消滅する。

5. 子どもの習得と大人の学習——わらべ歌を例として

40年くらい前、英文学者で今は故人となられた平野敬一（東京大学教授（1924-2007））の発言が注目された——英文学の王道を極めた日本の学者が、イギリス庶民の常識を知らないことがある、その一例がイギリスのわらべ歌（Mother Goose Nursery Rhymes）である（平野敬一 『マザー・グースの唄 イギリスの伝承童謡』 中央公論社[中公新書] 1972）。英語を母語とする子どもが子ども時代に歌いながら自然に身につけるイギリスのわらべ歌は、イギリスの言語文化の隅々にまで浸透し、世代、世紀、

(英語文化圏内の)国境を超えて受け継がれている。前段で話題にしたイギリスで育つ日本人の子どもの体験の中でも、イギリスのわらべ歌は重要な地位を占める。そのことを手がかりとして、英語習得と英語学習の問題についての考察をつづける。

(1)「バラの花の輪」(“Ring-a-ring o’ roses”)

最も有名なわらべ歌の一つとして次のものがある。

Ring-a-ring o’ roses,
A pocket full of posies,
A-tishoo! A-tishoo!
We all fall down.
(輪をつくろうよ バラの花の輪、
ポケットいっぱい 花詰めて、
ハックショ、ハックショ、
みんなバツタリ。)



Kate Greenawny: *Mother Goose* (1881)

イギリスの子どもたちが輪になって手をつないで踊っている情景を想像するとよい。Ringということばは多義的である。名詞として花の輪にも、踊りの輪にもなる。動詞としては、花の輪をつくる意味にも、踊りの輪をつくる意味にもなり得る。踊る子どもたちのポケットいっぱいの花束は香りがよいとともに、薬草の役割をはたす。3行目でハックション、ハックションとくしゃみをして、4行目でみんな倒れ込む。風邪を引いているようであるが、単なる風邪よりも（現代なら新型インフルのように）深刻で、中世の黒死病で多数の人びとが仆れる不吉なイメージである、というのは後になってつけ足した解釈のようであるが、その場合には、‘ring o’ roses’ は、黒死病による紅斑を暗示し、花束は死臭の消臭効果とともに予防効果（実際には薬石効無し）を暗示する (Iona and Peter Opie eds., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Oxford at the Clarendon Press, 1973, pp.364-365)。このように、わらべ歌は意味深長、多義的で重層的である。

音声に注目すると、1行目は強、弱、強、弱、強、弱の6音節、ringということばの繰り返しが音の効果をかもし出す。2行目は、弱、強、弱、強、弱、強、弱の7音節で成り立ち、行末のposiesと、1行目のrosesが脚韻を踏む効果がある。3行目はクシャミの擬音で、弱、強、弱の音節が繰り返されて6音節。4行目は、弱、強、弱、強の4音節。

このような説明は、子どもにとっては無用である。口承によって伝えられ、後世になって文字化されたわらべ歌を、英語を母語とする子どもは説明無しに口で歌い、身体で踊り、本能的に習得する。イギリスで育つ日本の子どもも同様である。イギリスの子どもと同じように、この歌を歌い、踊りながら、理屈抜きで本能的に習得する。それは知識ではなく、生活の一部となっている。その日本人の子どもの親は歌い踊ることはないかもしれないが、歌詞とメロディーが一体となって心に刻まれる。子どもといっしょでなく、親だけがイギリスで暮らしたとしたら、そもそもこの歌に出会うことはないかもしれない。歌との出会いは子どもを介して得られる二次体験であり、子どもに準じた擬似習得である。母国で学習した英語の知識を持つ親は大人として、上に説明したような情報を知識として補

うことができる利点を持つ。情報と知識を欠く点で子どもは不利に思えるかも知れないが、そもそも子どもはそれを必要としない。子どもの無意識的・本能的体験は、親の認識に先行する。ここにも習得と学習の違いが見られるが、両者は相互補完的と言える。

歌いながら子どもたちが輪になって踊るこのわらべ歌の情景は、フランスのわらべ歌「アヴィニョンの橋の上」(<Sur le pont d'Avignon>)と、日本の「かごめかごめ」を連想させる点が興味深い。類似性についての文化人類学的検証が可能であるかもしれないが、ここでは、言語の問題として考えることに留めたい。三者の比較は、英語とフランス語の類似性・近親性と同時に相違性、さらには英語と日本語とのより大きい相違性と無縁性を例証することになるであろう。

(2) 「アヴィニョンの橋の上」(<Sur le pont d'Avignon>)

「アヴィニョン橋」とは、フランスの観光名所の一つにもなっているあの有名なサン・ベネゼ橋(Pont Saint-Bénézet)である。アヴィニョンの城壁の外側にあり、ローヌ川に架かるこの橋の建設は、1177-1185年に遡り、本来22連のアーチ橋で、長さ920m、幅4mあったが、その後、戦による破壊と自然災害による崩壊によって、今ではアーチ4区画分のみが残り、川にせり出している。

<フランス語歌詞>	<英語歌詞>	<日本語歌詞>
Sur le pont d'Avignon	On the bridge of Avignon	アヴィニョン橋の その上で
L'on y passe, l'on y danse	They are passing, they are dancing,	みんな通って、踊ってる
Sur le pont d'Avignon	On the bridge of Avignon	アヴィニョン橋の その上で
L'on y danse tous en rond	They are all dancing in a ring.	みんな輪になり 踊ってる
Les beaux messieurs font comm'ça	Gentlemen go this way	殿方みんな ああやって
Et puis encore comm'ça	Then they all do this way.	も一度みんな ああやって
Refrain	Repeat	繰り返し
Les belles dames font comm'ça	Ladies go this way	ご婦人方も ああやって
Et puis encore comm'ça	Then they all do this way.	も一度みんな ああやって
Les officiers font comm'ça	Soldiers go this way	兵隊さんも ああやって
Et puis encore comm'ça	Then they all do this way.	も一度みんな ああやって
Les anges font comm'ça	Angels go this way	天使もみんな ああやって
Et puis encore comm'ça	Then they all do this way.	も一度みんな ああやって

第1行目にあるフランス語のpont(橋)はラテン語起源であるのに対して、英語のbridgeはゲルマン系のことば。Pontに含まれる鼻母音はフランス語特有で、Avignonの語尾、2行目と4行目のl'on(計3回)、4行目末尾のrond、5行目のfontと韻を踏む効果を持ち、これらの点で、フランス語の歌詞と、英語の歌詞との違いは大きい。反面、第1行目に配列された単語の品詞と語順は、仏英まったく同一である。繰り返しになるが、英語は本来5世紀に渡来したアングル人・サクソン人が持ち込んだゲルマン系の言語であったが、1066年のノルマン征服により、ノルマン人が持ち込んだノルマン・フレンチ、すなわちフランス系の言語との混成語として発達・形成が行われた。このような歴史的背景に起因して、英仏両言語間には、近親性・共通性・類似性と相違性とが共存する。日本語との間にそのような照応はまったくない。このことは、以下のすべての行に関して言える。

(3) 「かごめかごめ」

「輪になって踊る」情景が共通する「かごめかごめ」と比較すると何が見えてくるであろうか。ここでは、上で見た英語とフランス語の音声に対して、日本語の音声がいかに異なるか考えたい。英語ならびにフランス語と異なり、日本語の音節がすべて母音で終わることを強調するために、歌詞をローマ字化して併記する。

かごめかごめ	<u>Kagome</u> <u>kagome</u>
籠の中の鳥は	<u>Kago</u> <u>no</u> <u>naka</u> <u>no</u> <u>tori</u> <u>wa</u>
いついつ出やる	<u>Itsu</u> <u>itsu</u> <u>de</u> <u>yaru</u>
夜明けの晩に	<u>Yoake</u> <u>no</u> <u>ban</u> <u>ni</u>
鶴と亀が滑った	<u>Tsuru</u> <u>to</u> <u>kame</u> <u>ga</u> <u>subetta</u>
後ろの正面だあれ	<u>Ushiro</u> <u>no</u> <u>shomen</u> <u>dare</u>

(ローマ字に下線をつけた母音は長音化して歌われる)

ローマ字化してあらためて気付くのは、ban (4行目) とshomen (6行目) の語尾以外、すべての音節が母音で終わることである。日本語全般に拡大して考えると、50音すべて、音節の末尾は母音で終わり、子音で終わることはない。語尾に位置し、ローマ字でnに変換される「ん・ン」も、「ぬ」に置換されると母音であるように、英語のnとは異なる。音節の末尾が子音で終わり得る英語と、かならず母音で終わる日本語との決定的な違いは、日本人の英語学習を困難にする要因の一つとなる。英語学習の前に、日本語のローマ字化を教わることがあるが、それは英語学習を助けず逆に妨げとなる。ましてや、すべての音節が母音で終わる平仮名・片仮名で英語の音声を表記することは、英語の正しい発音の学習のために、百害あって一利もない。

イギリスのわらべ歌は、英語を母語とする子どもの母語習得の過程だけでなく、イギリスで暮らす日本人の子どもが英語を習得する過程にも通ずる典型的な例であると言える。さらに、日本人の子どもとともに暮らす親である大人にとっても、それは子どもを媒介とした二次体験としての英語の習得であると同時に、意識的学習として、相補的であることが考察された。また副次的に、英語とフランス語の場合には、相違性と同時に、近親性・類似性・共通性があり、相互に習得や学習を助長し合うが、英語と日本語との間ではそれがないことも判明した。イギリスで暮らす日本人の子どもの体験が、小学校段階に早期化された日本の英語教育にとってヒントとなるかどうか、考えることが求められている。

6. 早期英語教育の先にあるもの

(1) ふたたび早期英語教育について

前段では英語文化圏で育つ日本人の子どもの体験と、それに関連して、イギリスの言語文化の真髄と言えるわらべ歌について考察した。子どもの体験も一律ではない。幼少時にある程度の期間英語文

化圏に滞在して身につけた英語の発音はあとに残り、帰国後英語から数年遠ざかっていたあと、忘れたころに英語を話すと、母語者に近い発音が元通り保たれているという話を耳にする。英語で読み書きができるようになって帰国した場合には、英語の総合能力がより持続的に保たれると言われる。論理的思考回路が、日本語ではなく英語で形成されたあと帰国する事例がある。この場合には、母語としての日本語による論理的思考力の形成はどうなるであろうか。二つの可能性が想定される。①英語による論理的思考回路はできたが、日本語による論理的思考回路が欠落する。②英語による論理的思考回路が残ると同時に、日本語が問題なく習得されて、日本語による論理的思考回路も形成される。後者がいわゆる「バイリンガル」(bi-lingual) の一様態であるが、これはそれ自体として言語学的・心理学的・社会学的に奥の深い問題であるので、ここで今これ以上深追する余地はない。

日本の小学校における早期英語教育擁護論は、英語の擬似母語環境のなかで英語の擬似母語体験をさせる目的のためには、低年齢の子どもの方が高年齢のこどもに比して、より柔軟な受容性を備えているという暗黙の前提に立っていると考えられる。英語文化圏で育つ日本人の子どもの「体験」は「擬似体験」とはおのずから異なるが、少なくともヒントにはなる。早期英語教育に対する反対論・慎重論に関して本稿では十分な検討を試みておらず、1(4)の末尾で触れたにすぎない。早期英語教育が実施されたいま、それが日本の子どもにとって何らかよい教育的効果を持つと楽観的に考えるしかない。だが早期英語教育の是非よりも、真の問題はその先にある。①日本人の英語能力が十分かどうかは、子どもが成長したあとの問題である。②早期英語教育によって、将来、成長したあとの英語の能力が保証されているわけではない。③早期英語教育は、それ以後の中学、高校、大学における英語教育にどうつながるか、政策担当者に展望はあるのか。④さらに、早期英語教育政策は、国際基準が求められる学術、企業、国際政治などの場で不可欠な極度に高度な英語能力の必要性に対応していると言えるかどうか——残念ながら、言えないであろう。国際的な場で活躍する日本人が必要とする高度な英語能力をいかにして達成するか、これこそ早期英語教育にもまして重要課題である。

(2)文法・読解中心の英語教育の意義

文法・読解中心の英語教育が、小学校における早期英語教育と中学・高校における「コミュニケーションのための英語」の対立軸として考えられる傾向がある。この二項対立が危険であることについても1(2)で触れた。繰り返して言えば、両者は矛盾しない。英語母語者は英文を理屈抜きに把握することができる。しかし英語を外国語として学習する場合には、文法の知識は不可欠である。大意を大づかみに把握することが必要な場合もあるが、文意をより正確により深く理解することも重要であり、そのためには、文法の知識に基づいて、細部が相互にどのように支えあっているか文の構造を把握することが求められる。また、日本語もそうであるが、歴史の長い英語の場合、複数の同意語があると同時に、一つのことばが多義的であるので、識別して意味を読み取ることが肝要である。

本稿の元になる公開講座の草案を練る過程で、文法の基礎知識を基に文の構造を把握し文を読み解く作業なしにはいかなる英語教育もあり得ないことを、思いがけず再認識させられる体験に遭遇した。「アヴィニヨンの橋の上」の、フランス語から英語への機械による自動翻訳をインターネットで検索した時のことである。仏英それぞれのインターネットで複数の自動翻訳が検出された。当然かもしれないが、イギリスのインターネットの英訳がもっとも的確であった。フランスの数種類のインターネットの自動翻訳は、微妙な差があると同時に、完璧なものは皆無であった。この例に関する限り、人の

頭脳による翻訳が機械による翻訳に勝ると言える。その理由は、正確な翻訳の前提となる文の構造の把握と、そのために必要な文法の知識と、ことばの意味の識別が、教育によって人の思考回路に収納されているからにほかならない。

「アヴィニヨンの橋の上」の英訳でなく、より身近な例として、2008年11月のオバマ大統領の、あの歴史に残る名演説となった格調高い勝利宣言を取り上げる。その冒頭の文は、三つの関係代名詞 who に導かれる三つの修飾節を畳み掛けるように連ねて聴衆に語りかけアメリカ的価値に対する疑念を晴らす、if で導かれる長い条件文の従属節が先行したあとに、短い主文が続く。条件文は一種の修辭疑問に相当し、それにより疑問がすべて解消され、短い主文の主張が強調される効果を持つ。これをインターネット上の機械による自動翻訳で検出するとどうなるか紹介し、それを比較のために拙訳とともに併記する。

原 文	機械による翻訳	自分で訳すと ...
If there is anyone out there who still doubts that America is a place where all things are possible; who still wonders if the dream of our founders is alive in our time; who still questions the power of our democracy, tonight is your answer.	向こうのまだそのアメリカを疑う誰かがいるかどうかは、すべてのものが可能である場所です。そしてその人はまだ、我々の創設者の夢が、我々の時間に生きています。そしてその人はまだ、我々の民主主義の力が今夜あなたの答えであると疑います。	皆さんの中に、アメリカ合衆国はあらゆることが可能な場所であることを未だに疑い、われわれの建国の父の夢がわれわれの時代にも生き続けているかどうか未だにいぶかり、わが国の民主主義の力を未だに疑問視する人がいますか、もしもいるとしたら、[私が勝利宣言をする]今夜こそが、皆さんにとって答えとなります。

上記の機械翻訳に関するかぎり、英文はその構造が把握されないまま恣意的に寸断され、個々の単語が多義的である場合も意味の識別が行われず、文字通り機械的に置き換えられていて、日本文として意味をなさない。勝利宣言の機械翻訳の全文を精査すると、ほとんどすべての場合に同じ欠陥と機械の限界が見えてくるが、スペースの制約上この一例に留める。この欠陥は、文法の知識を欠くために文の構造の把握ができず、単語の意味の識別も行うことができない英語学習者の訳出例にも共通して見られであろう。

先に「アヴィニヨンの橋の上」の原文と英訳とをくらべて、フランス語と英語とがたがいに外国語であり、両言語の音声にも個々の単語にも顕著な相違がありながら、文の構造が共通することを見た。両言語には、思考・発想・表現の回路の共通性が歴然と存在する。両言語の母語者にとって、一方から他方への変換は苦もなく容易に行われるはずである。それに対して、オバマ演説の原文と日本語の翻訳との間では、思考・発想・表現の回路の差異、それに伴う構文と修辭法の違い、単語の多義性と訳語の識別などがすべて関わってくる。いま、一方から他方への変換を、機械によって機械的に行うことの欠陥と限界を考察した。日本語とまったく異質な英語との間で理解が成立するためには、文法の知識の仲介による思考・発想・表現の回路の変換が必要である。日本で文法・読解中心の英語教育が重要な役割を果たしてきたのは、それが不可欠であり、不可避であるからである。

思考・発想・表現回路の変換とは、広い意味での「翻訳」である。より限定的な意味で、文学作品の翻訳がある。原文は翻訳に優先するが、すぐれた翻訳が原文を超えることもある。アンデルセンの翻訳である森鷗外の『即興詩人』の評価は、デンマーク文学の中での原作の評価を凌駕し、翻訳が創作の域に達した顕著な例である。見方を変えると、すぐれた翻訳は母語をより豊かにする。本題に戻ると、文法・読解中心の英語教育は、論理的な英文の構造を分析する作業を通じて、日本人の論理的な思考・発想・表現回路を強化し、日本語を磨くことに貢献する副次的効果があることも見逃されてはならない。

文法・読解中心の英語教育に対する別の流れとして、キリスト教布教のための教育機関の他に、津田英学塾がある。明治政府によって派遣され幼少期から大学卒業までアメリカで成長した創設者津田梅子の英語教育の理念は、日本語を介さずに英語を理解し、英語で発信し、英語によるコミュニケーションを目指すもので、その伝統はいまも生きている。しかしながら、繰り返す言うと、コミュニケーションのための英語教育と文法・読解中心の英語教育とは二項対立・二律背反的ではなく、たがいに補完し合うべきものである。

(3)真の自己表現に向けて

学術、企業、外交などいずれの分野であれ、英語能力の究極の達成目標は英語による自己表現である。それは一日にして達成されるわけではない。バイリンガルがむしろ例外的であるとすると、まず母語による論理的思考回路の形成が先行し、そのあとで外国語が学習されるのがふつうであろう。この場合、当然ながら母語の支配が強い。このような状況において、日本人の英語による自己表現は、どのような過程を経るだろうか。次のような諸段階が想像される。

- ① 日本語による論理的思考回路ができあがっているので、表現したい伝達内容を不可避的に日本語で発想し、それを英語に置き換える。この過程にも、諸段階ある。
- ② 単語の単位で置き換えが行われる。これにはたいへん時間がかかるので、一人で考えるのであれば問題ないが、相手があって対話をする場合には、これでは間に合わない。
- ③ そのことに気付くと、次の段階として、単語よりも長い句や節を単位として発想し、置き換えをする。しかし、これでも、自然な流れの対話は困難である。
- ④ 次の段階として、文単位で発想し表現する。すなわち、文頭のことばを切り出したときには、一気に文末に到る思考の流れを瞬時に思い描きながら、英語で発想し表現する。
- ⑤ この段階にまで達すると、日本語から英語に置き換えるのではなく、英語自体で発想し、表現することになる。
- ⑥ もちろん日本人である以上、日本語による論理的思考回路を棄てることは決してない。したがって、日本語による論理的思考回路と、英語による論理的思考回路とが、意識の中で共存している。どちらを用いるか、目的に合わせて選択する。これは口頭表現に限らない。学術論文を書く状況を想像してみよう。日本語でも英語でも、どちらで書くことも可能であるが、英語で書くと決めた場合には、意識の中に共存している二つの言語のうち、日本語ではなく英語を選び、英語で発想し英語で書くのである。

日本語で発想して書き、それを英語に翻訳するのではなく、意識の中に共存する二言語から英語を

選んで英語で発想して書くとはどういうことか。日本語と英語には、それぞれにことばの意味と同時に、音声的効果が共存し、意味と密着している。日本語で発想して書く場合にも言えるが、英語には英語の音声的効果がある。個々の母音や子音が連想を伴ってかもし出す音の効果、個々の独立した音節だけでなく、音節が連なる際の連音の効果、個々の単語だけでなく、単語が連なって音節の組み合わせがつくり出す旋律や抑揚など、これらすべてがことばの意味と不可分に結びついている。英語で発想し英語で書く場合、ことばを選ぶことは意思的行為であり、従ってことばが無意識に生まれ出るとは言えないが、意識の奥底で意味と音とが響き合ってことばが生まれ出る。英語による自己表現の最終段階においては、音声と構造と意味とが三位一体となってことばが紡ぎ出される。

7. おわりに

本稿は今日広く日本社会で議論されている英語教育と英語学習に関して、錯綜するさまざまな問題を整理するために執筆された。何度か断ったように、「処方」ではなく「記述」を目的とした。議論は党派性を伴うが、一見対立する立場はそれぞれ正しく、真理はその中間にあることが多い。だとしたら、異なる立場の融合こそ正しいと言えよう。繰り返しになるが、日本において主流となってきた文法・読解を中心とした英語教育と、「コミュニケーションのための英語」とを二項対立として捉えるべきではない。英語を学ぶ究極目標としてあるのは、グローバル化された今日の世界において、学術、政治、経済、外交、国際協力などの場で、日本人がいかに受信と発信を行い、自己表現するかということである。目標への道のりは遠いが、路線は複数あり、選択は自由である。